

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Accentnation of -ant/-ent and theories for lexicon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三間, 英樹, Zamma, Hideki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1651

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



-ant/-ent の強勢付与とレキシコンの理論

三 間 英 樹

0. はじめに

本稿では、英語の接辞 *-ant/-ent* が付加される時の強勢付与のパターンを明らかにする。そして、Chomsky and Halle (1968) 以来の音節化をもとにする強勢付与のシステムでは、このパターンが説明しきれないことを見る。代案として最適性理論に基づく分析を提示し、*-ant/-ent* には特別な制約が働いており、それがあつた場合には違反されることもあると主張する。その上で、このような強勢に関する制約は、接辞自身の語彙情報として蓄えられていると考えた方が妥当である、と主張し、そのための理論化についての検討を行つてゆく。

1. *-ant/-ent* の強勢パターン

ではまず、*-ant/-ent* を含む語の実際の強勢パターンを見てみよう（本稿では、*-ant/-ent* を同じ形態素の自由変異として扱うことにする。以下で時折述べるように少々¹の予測は可能だが、ほとんどの場合、どちらが出現するか¹の予測は不可能である）。最初に得られる一般化は、語幹の最終音節が閉音節の場合、そこに強勢が付与される、ということである。

- | | | | |
|------------|------------|---------|------------|
| (1) ascénd | ascéndant | succúmb | succúmbent |
| accórd | accórdant | depénd | depéndent |
| resémble | resémblant | indúlge | indúlgent |

1 唯一の例外は、*convérse/cónversant* である。

expéct expéctant persist persistent

左側が -ant を含む語，右側が -ent を含む語である。さらに各々の段で，左側が語幹となる語である（後述するように，強勢の移動や短母音化について言及するため，本稿では派生語のみを調査の対象とした）。

一方，語幹末の音節が軽音節の場合，その音節のさらに一つ前の音節に強勢が付与される。(2)を見てみよう。

(2) vigil vigilant differ different
 cómbat cómbatant suffice sufficient
 sólicit sólicitant prófit proficient

各々の段の左側の語群が示すように，語幹末の音節の母音はもともと短く，語幹末の子音が -ant/-ent の頭子音として音節化されたため，軽音節となっている（一方 (1) では，語幹末子音が頭子音になってもまだ子音が残っているため，閉音節が形成されている）。また，一部では -ent の前に母音 /i/ が挿入される場合もあるが (sufficient など)，この母音を含む音節も軽音節であるから，やはりその前の音節に強勢が付与されている（なお，このような挿入が観察されるのは，-ent 形においてのみである）。

では，上記の二つの事実から，「語幹末の音節が重音節の場合その音節に，軽音節の場合その一つ前の音節に強勢が付与される」と一般化できるかという点，そうではない。以下の例を見てみよう。

(3) rútile rútilant coincide coíncident
 ignóre ignorant confide cónfident
 appertáin appúrtenant compéte cómpetent
 recúse récusant pertáin pértinent
 récognize recógnizant preváil prévalent

これらの語では，語幹末音節の母音はもともと二重母音か長母音である。ということは，これらを含む音節は重音節であるから，上述のような一般化によれば強勢が付与されることが予測される。だが，事実はそうでなく，その

一つ前の音節に強勢が付与されている。しかも、もともとの母音が短母音化されている。

だが、このような二重母音・長母音の短母音化には、例外も観察される。たとえば、以下のようなものがある。

(4) a. -duce, -cede, -hale で終わる語幹

addúce/addúcent, abdúce/abdúcent

antecéde/antécédent, précéde/précédent²

exhále/exhálant, inhále/inhálant

b. -y [ai] で終わる語幹³

defý/defiant

comply/compliant

c. [iəɾ] で終わる語幹⁴

appéar/appárent, inhére/inhérent, adhére/adhérent

これらの語では、-ant/-ent が付加された場合でも短母音化が起こらず、そのためその長母音・二重母音に強勢が付加されている。なお、(4b) に属する -ent 形は存在しない。

これらの例外は、ある特定の接辞を含んだ語幹だけに限られているように思えるので、本稿では、それらの接辞に何らかの短母音化を免れるための情報が含まれていると仮定し、一般化の際の考慮から除外しておくことにする。⁵ そうすると、今までの観察から明らかになったように、-ant/-ent を含む語の強勢付与のパターンは、以下のようにまとめられる。

(5) a. 語幹が閉音節の場合、そこに強勢が与えられる。

2 précédent という発音もある。

3 suppliant (<supply) のみが例外である。

4 révère/révérent は例外である。また appárent は、もともと二重母音だった音節に強勢があるものの、短母音化が起きている(だが [éə] という発音もある)。

5 (4) に挙げた以外の短母音化の例外として、protrúde/protrúdent, connive/connivent, convéne/convéniént などがある。これらは例が少ないため、-trude, -vene などの接辞自体に何らかの指定があるのかどうかははっきりしない。

- b. 語幹が軽音節の場合、その前の音節に強勢が与えられる。
- c. 語幹の音節が長母音・二重母音を含んでいる場合、その音節は短母音化し、その前の音節に強勢が与えられる。

2. -ant/-ent のクラス

ここで Siegel (1974) の観点から、-ant/-ent の属するクラスについて考えてみよう。まず強勢付与において、語幹となる語の強勢のある音節とは別の音節に強勢が移動する事実が観察される。

(6) triumph triúmphant cónstitùte constitúent
 sínifìy sínifìcant mágnifìy mágnifìcant

また、-ate を含む語に付加された場合、その -ate が削除されるという現象も見られる（その際強勢付与は、削除が起こった後の連鎖に対して(5)のやり方で行われる⁶）。

(7) árrogàte árrogant violàte violent
 stímulàte stímulant
 stágnàte stágnant
 córuscàte corúscant

このような -ate の削除は -able の接辞不可の際にも見られ (cf. Aronoff (1976)), -ate の持つ特殊性の一つと考えられる (cf. Zamma(1995))。なお、-ate で終わる語幹に -ent が付加されるのは、violent(<violate) のみである。

さらに、前節で見たように、短母音化も -ant/-ent の付加の際に観察される。また、本稿では調査の対象としなかったが、語根 (Root) に直接付加されている語も数多く存在する。このような強勢の移動、分節音の変化・削除、語根への付加などはクラス 1 に属するもののみに見られることから、-ant/-ent はクラス 1 接辞であると結論付けられる。

⁶ hibernàte/hibernant, intégràte/integrant では、-ant の前の閉音節に強勢が付与されず、例外となっている。

3. 韻律理論と -ant/-ent

では次に、-ant/-ent を含む語に対してどのように強勢が付与されるのか、そのシステムについて考えてみよう。Chomsky and Halle (1968) 以来の韻律に関する理論では、大まかに言うと以下のようなシステムが英語に関して仮定されている。

- (8) a. 最終音節は韻律外になることがある。
- b. 韻律外の音節を除いた最後の音節が重音節の場合、そこが強勢を担う。
- c. その音節が軽音節の場合、その前の音節が強勢を担う。
- d. クラス 2 の接辞は強勢付与の計算に関与しない。

これに照らし合わせて、1 節で見た -ant/-ent のパターンを考えてみるとどうだろうか。まず、-ant/-ent は韻律外であると考えられる。なぜなら、もしそうでなければ、-ant/-ent が重音節を形成するため、それ自身が強勢を担っているはずだからである。実際には、-ant/-ent より左にある音節に対して計算が働くのであるから、これらは韻律外のはずである。また、2 節で見たように -ant/-ent はクラス 1 の接辞であるので、韻律外という方法以外では「強勢付与の計算に関与しない」という事実は捕らえられない。

だが、上記の観察が正しいとしても、(8)のシステムだけでは正しい強勢が予測できない。まず、(5)に挙げたパターンで言うと、(5a), (5b)については問題なく予測ができる。-ant/-ent を韻律外にし、その前の音節、すなわち語幹末の音節の重さで計算すれば、(8b), (8c)によって適切な音節に強勢が付与されるからである。だが、(5c)のパターンはそうはいかない。なぜなら、長母音・二重母音を含む音節も重音節であるので、(8b)の一般化に従えば、(5a)同様語幹末の音節が強勢を担うはずだからである。仮に Halle and Vergnaud (1987) の仕組みで、この手順を図示してみよう(大文字 I は二重母音を、丸括弧は韻脚を、鉤括弧は韻律外性を表す)。

- (9) a.
- | | | | |
|------------|-------------|-----|-------------|
| | | * | |
| | | (*) | |
| | → * * <*> | → | * (*) <*> |
| depend+ent | de pen dent | | de pen dent |
- b.
- | | | | |
|-------------|-------------|-------|--------------|
| | | * | |
| | | (* *) | |
| | → * * <*> | → | (*) (*) <*> |
| confIde+ent | con fl dent | | *con fl dent |

(9a), (9b)とも, -ant/-ent が韻律外になった後, 語幹末の重音節が単独の韻脚を形成し, 強勢が付与されている。この図で明らかのように, (8) の仕組みでは正しい強勢パターンが予測できない。

だが Halle and Vergnaud (1987) ではリズム規則という仕組みも提案されている。この規則は, 最終音節に与えられた強勢を, 一つ前の韻脚の主要部に移動させるものである。この規則はレベル2で働くことされているが, このレベルでは音節の重さとは無関係に強弱脚が形成されるとされているので, 基本的に最終音節の二つ前の音節に強勢が与えられることになる。では, このリズム規則を用いれば, (5) のパターンの予測は可能だろうか。

結論から言うと, (5b), (5c) の予測は可能だが, 今度は (5a) の予測が不可能になってしまう。

- (10) a.
- | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|
| | * | * | * |
| | (*) | (* *) | (*) * |
| | * * [*] | → (* *)[*] | → (* *)[*] |
| dependent | dependent | | *dependent |
- b.
- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| | * | * | * |
| | (*) | (* *) | (*) * |
| | * *[*] | → (* *)[*] | → (* *)[*] |
| confI dent | confI dent | | confI dent |

(10)では, レベル1で作られた韻脚は角括弧で示されている。(10a), (10b)とも, レベル2では音節の重さに関係なく強弱脚が形成される(二つ目の構造)。そこへリズム規則が適用すると, とともに後ろから3番目の音節に強勢

が与えられることになる（右端の構造）。これは、(5b), (5c) にとっては実際と同じ音節であるが、(5a) にとっては事実と異なる。やはり、リズム規則による分析にも問題が生じる。

その他の理論での可能性も検討してみよう。まず Halle (1998) は、音節の重さに対する感受性が語によって異なりうる、とする理論を提示している。この理論にしたがって、-ant/-ent は音節の重さに関係なく強弱脚が形成されると考えたらどうだろうか。この場合、上記のリズム規則による分析と同じ問題が生ずる。つまり、(5c) のパターンはうまく説明できることになるが、(5a) のパターンが説明できなくなるのである。このパターンは、明らかに音節の重さが影響している。重音節の中でも閉音節だけに音節の重さが関係する、と仮定するのは無理があろう。

また、Burzio (1994) は独自の韻律理論を提示して -ant/-ent 形のパターンの分析を試みている。だがその理論は、他の言語で観察されない特殊な韻脚を仮定している上、空母音を仮定しなければならないなど、恣意的な部分も多く、完全に適切な分析を提示しているとは言いがたい。

以上見てきたように、現在までのところ、-ant/-ent の強勢パターンの適切な分析は提示されていないと言える。そこで次章では、適切な分析の提示を試みたい。

4. 最適性理論による分析

(5) のパターンで明らかなのは、基本的に -ant/-ent が音節の重さに対する感受性を示すということである。長母音・二重母音を含む音節がある場合にだけ、その感受性が守られない。そこで本稿では、何らかの要請が -ant/-ent に働いていて、それがあつ場合にだけ効力を及ぼし、重さへの感受性を破らせていると考えたい。つまり、複数の要求の間の力関係によって、強勢の与えられ方が決まると考えるというわけである。

このような複数の力の間の関係性をうまく定式化しているのが、最適性理

論(cf. Prince and Smolensky (1993), etc.)である。そこでこの節では、この理論の枠組みを用いて -ant/-ent 形の強勢付与の仕組みを分析していくことにする。まず、下記のような制約群を仮定してみる。⁷

- (11) a. **FootForm**: 強弱脚 (LL, H, HL) を形成せよ
- b. **Faith-C**: 出力と入力の子音はお互いに忠実でなければならない⁸
- c. **Faith-V**: 出力と入力の母音はお互いに忠実でなければならない
- d. **2-Ahead**: 接辞の二つ前の音節に強勢を付与せよ

(11a) は英語に一貫して見られる韻脚の形について述べたものであり (H は重音節, L は軽音節を表す), (11b), (11c) も一般的な制約である。(11d) が、問題の -ant/-ent に対して働いている制約である。さらに、これらの制約が (12) に示すような関係にあると仮定する。

(12) **FootForm, Faith-C** > **2-Ahead** > **Faith-V**

つまり、**FootForm** と **Faith-C** がもっとも強く働く制約であり、その次が **2-Ahead**、最後が **Faith-V** であるとするのである。

このような制約間の階層関係を仮定すると、(5) で見た -ant/-ent の強勢パターンは以下に示すように説明できる。まず (5a) のパターンについて、(13) の表を見てみよう。

(13)

depend+ent	FootForm	Faith-C	2-Ahead	Faith-V
☐de(pén)<dent>			*	
(dépen)<dent>	*!			
(dépe)<dent>		*!		

7 このほかに韻律外性を要求する制約も必要だが、説明を簡略にするため、ここでは省略する。

8 この制約は子音の挿入・脱落を禁止するものであるが、脱落だけに関して言えば、Borrow-sky(1988)の仮定する Melody Integrity のような定式化も可能である。だが本稿では細かい定式化は問題にせず、(11b)で分析を進めていく。

/depend+ent/という入力に対して考えられる三つの可能な出力のうち（注7で述べたように、接辞を韻律外にしない可能性については除外することにする）、表の一番上の候補は -ant/-ent の直前の音節に強勢を付与しているため、その二つ前の音節に置けという **2-Ahead** の制約を違反している。二つ目の候補はこの制約を満たしているが、(LH)という韻脚を形成し **FootForm** に違反している。三つ目の候補は、入力形にある /n/ を削除することで (LL) という韻脚が形成でき、**2-Ahead, FootForm** の両方を満たしているが、子音の削除をしたことで **Faith-C** に違反している。このようにどの候補も何らかの制約を違反してしまうが、これらの制約の中に(12)のような階層関係があるため、もっとも違反の程度が低くなる最初の候補が最適候補となり、出力として選ばれることになる。

では次に、(8b) のパターンについて考えてみよう。

(14)

vigil+ant	FootForm	Faith-C	2-Ahead	Faith-V
☐(vigi)<lant>				
vi(gi)<lant>	*!		*	
vi(gí)<lant>			*!	*

最初の候補は -ant/-ent の二つ前の音節に強勢を与え、韻脚の形も問題なく、削除や挿入も行っていない。二つ目の候補は接辞の直前の音節に強勢が与えられているばかりか、軽音節一つの韻脚になってしまっている。三つ目の候補のように母音を長くすれば韻脚の形は問題なくなるが、接辞の直前に強勢がある点で問題がある（また、母音の長さを変えたことで Faith-V にも違反している）。よって、なにも違反していない最初の候補が最適な候補となる。

では問題の、(5c) のパターンはどうなるだろうか。

(15)

aspire+ -ant	FootForm	Faith-C	2-Ahead	Faith-V
as(pí)<rant>			*!	
(áspi)<rant>	*!			
☞(áspi)<rant>				*

語幹末の二重母音を含む音節で韻脚を作った最初の候補は、その音節に強勢を付与したことで **2-Ahead** に違反している。二番目の候補のように接辞の二つ前の音節にそのまま強勢を付与しようとする、(LH) という韻脚を形成してしまい、**FootForm** に違反する。三番目の候補のように語幹末の二重母音を短母音化すると、**Faith-V** には違反するが、**2-Ahead** も **FootForm** も満たすことができる。(12) の制約の階層関係によれば、**Faith-V** の違反がもっとも軽微なものになるので、この三番目の候補が正しく産出されることになる。

このように最適性理論では、制約とは絶対的な力を持つものではなく、相対的な力関係の中で破られることもありうるものである。よって、この理論に基づけば、一部矛盾するような振る舞いを示す (5) の分布も問題なく分析できることになる。つまり、基本的には語幹末から二つ目の音節に強勢を付与する制約が働いているのだが、韻脚の形の適格性の制約と子音の削除を禁止する制約がその制約より強く働いているため、語幹末が閉音節の場合のみ問題の音節に強勢を付与することができず、(5a) のような分布になっていると分析できるのである。

5. レキシコンの理論

以上では、-ant/-ent には **2-Ahead** という制約が働いているとして分析を進めてきた。この制約はしかし、英語の語彙全般に渡って働いているものではない。つまり、多くの場合、接辞が韻律外であれば、純粋に語幹末の音

節の重さに従って韻脚が形成されるのである。では、このようなある特定の場合にのみ制約が働くという事実は、どのように捉えることができるだろうか。以下ではこの問題について考えていきたい。

5.1 語彙音韻論

まず、Kiparsky (1982, 1985) らによって提唱された語彙音韻論の枠組みでの分析の可能性を考えてみよう。この理論では、レキシコンは概略以下のように構成されていると考えられている。

- (16) Level 1: Morphology \rightleftharpoons Phonology
Level 2: Morphology \rightarrow Phonology
Post-Lexical: Phonology

つまり、レキシコンには（後語彙層を別にすると）二つのレベルがあり、それぞれのレベルで形態論・音韻論があると考えるのである。このモデルでは、ある接辞はどちらかのレベルで付加され、ある音韻規則もどちらかのレベルでのみ働くことになる。ここで -ant/-ent の問題について考えると、**2-Ahead**（あるいはそれに対応する規則）があるレベルだけに働いていて、-ant/-ent だけがその制約の適用を受ける、と考えることができるかもしれない。

だが、このような分析は実際には不可能である。2節で見たように、-ant/-ent はクラス1接辞（レベル1で付加される）だが、ほかのクラス1接辞には **2-Ahead** が働いていないのである。同じレベルで付加される接辞が異なる振る舞いをするのは、このモデルでは説明できない。

5.2 語彙層モデル

Itô and Mester (1995a) は、日本語の大和言葉、漢語、外来語などについて、それぞれが独自の語彙層をなすとするモデルを提案している。そして、その層ごとに働いている制約が異なると分析する。Itô and Mester (1995b) ではその主張を最適性理論の枠組みで発展させ、語彙層ごとに制約の階層関

係が異なると主張している。例えば、下記のような階層関係である。

- (17) a. Yamato: SyllStruc } NoVoiGem } No-[p] } PostNasVoi }
Faith
- b. Sino-Jap: SyllStruc } NoVoiGem } No-[p] } Faith } PostNas
Voi
- c. Foreign: SyllStruc } NoVoiGem } Faith } No-[p] } PostNas
Voi
- d. Alien: SyllStruc } Faith } NoVoiGem } No-[p] } PostNas
Voi

ここでは個々の制約について細かく見ていかないが、(17a-d)で制約の順序付けが異なっていることがわかる。

このようなモデルを今回の分析に当てはめれば、-ant/-entの形成する語彙層においてのみ **2-Ahead** が強く働いていると説明することができるだろう。つまり、-ant/-entの属する層では **2-Ahead** が上位に位置付けられているが、その他の層では下位に位置付けられているとするのである。

- (18) a. -ant/-ent: FootForm, Faith-C } 2-Ahead } Faith-V
- b. その他: FootForm, Faith-C } Faith-V } 2-Ahead

この分析は一見うまくいくように思えるが、いくつかの問題をはらんでいる。第一に、上記の日本語の例は独立して定義しうる語彙種について層を設けていたが、ここではそうではなく、単独の接辞について層を設けなくてはいけないという問題がある。Siegel (1974) によって英語には二つのクラスが存在することが明らかになったが、この -ant/-ent は明らかにクラス1であるにもかかわらず他のクラス1接辞とは異なる振る舞いをしており、(18a)をクラス1接辞のための順序付けとすることはできない。となると、-ant/-entだけの層を認めなくてはならなくなるが、そのような層分けを許していくと、Inkelas, Orgun and Zoll (1997) が指摘するとおり、下手をすれば現象ごとに語彙層を設けることになりかねず、歓迎できる方向性ではな

いだろう。

また、このようなモデルでは忠実性制約の順位だけが変わりうると仮定されていることも問題となる。(18)では忠実性制約である **Faith-V** の位置が移動しているように見えるが、他の音韻現象なども含めて考えると、**-ant/-ent** に対して特殊に働いているのは **2-Ahead** だけであるので、実はこの制約が移動していると考えた方が適切だろう。となると、明らかに前述の仮定と矛盾することになってしまう。

5.3 制約の分割

5.2 節のモデルと類似しているが、忠実性制約を語彙層ごとに分割してそれらを異なる順位に位置付けるモデルも存在している。例えば Benua (1997, 1998) は、英語のクラス性の説明のために、ある語とその派生語との間の忠実性制約を二種類に分け、それらを異なる位置に配置するモデルを提案している。

(19) a. 子音結合簡略化:***mn]**., **OO_r-Dep** } **IO-Max** } **OO_r-Dep**

b. 強勢付与: **Nonfinal**, **OO_r-Anchor** } **Align-R** } **OO_r-Anchor**

例えば上記の順位付けでは、**OO-Dep**, **OO-Anchor** という忠実性制約が二つに分割され、異なる位置に置かれている。

しかし、前節でも述べたように、**-ant/-ent** の強勢付与で問題になるのは忠実性制約でなく **2-Ahead** であるので、このモデルでの仮定と矛盾することになってしまう。また、英語のクラス全体についてではなく、**-ant/-ent** に対してのみの階層関係が必要になるという問題も生ずる。さらに、(19)で明らかのように、このモデルでも結局は現象ごとに異なる階層関係を仮定することになってしまい、そもそも根本的なクラス性の説明になっているかどうか疑問であるという問題も生じさせている。⁹

9 Zamma(1999)が指摘するように、Benuaの理論では接頭辞のクラス性の説明ができない、という問題もある。

以上見てきたように、これまでに生成音韻論で仮定されてきたレキシコンのモデルのもとでは、問題の現象が適切に捉えきれないことは明らかである。では、どのような代案となるモデルを構築すれば、特定の接辞のみに働く現象というものが適切に分析できるであろうか。次章では、この問題について考えていくことにする。

6. 語彙指定理論

6.1 直接最適性理論

代案となるモデルの検討に入る前に、語彙の基底表示について独自の提案をしている Golston (1996) の理論を概観してみよう。直接最適性理論と名づけられた彼の理論では、語の基底表示とは個々の分節音ではなく、その分節音の出現を禁ずる制約の違反であるとされている。例えば *cat* という語の基底表示は、以下のようなものとなる（“R” の数が違反の数を表す）。

(20)

No Stop	Align Cor	No Dor	No Front	No Lo
RR	R	R	R	R

つまり、「閉鎖音があってはならない」、「前舌母音があってはならない」などの制約に対する違反が集まったものが *cat* の基底表示であるとするのである。

このような基底表示のあり方が可能なら、このアイデアを応用して、制約の違反ではなく制約そのものを語彙の基底表示に組み込んでみてはどうだろうか。つまり、*-ant/-ent* については、**2-Ahead** という制約が語彙的に指定されていると考えるのである。一方で、その他の多くの接辞にはこの制約は指定されていない、とする。このようにすれば、*-ant/-ent* について独自の層を形成する必要もなくなり、特に語彙層モデルにとってのもっとも大きな問題は生じないことになる。また、忠実性制約以外の制約を分割したり順

位を変えたりする必要も生じない。

6.2 さまざまな語彙指定

実際、語形成の際のさまざまな事実を観察してみると、それぞれの接辞にはそれ自身の独自の指定があるとしか考えられないことが、多数存在することに気が付く。まず、接辞が付加される語幹の種類について、何らかの制限があることは普通である。例えば Selkirk (1982) は、次のような事実を指摘している。

- (21) a. -ity: [A^r __] b. -less: [N __]
 -ive: [V^r __] -ness: [A __]
 -al: [N^r __] -er: [V __]

(21)では、接辞の語幹の品詞の種類や、それが語根であってよいかどうか((21a)のように r で示されているものは語根でも良い)ということが指定されている。

また Fabb (1988) は、語彙音韻論のクラス性だけに基づく語形成を批判しながら、ある接辞が別の接辞を持つ語幹に付加されうるかどうかを調査し、次のような事実を明らかにした。

- (22) a. すでに接辞を持つ語幹に付加されえないもの:
 -ate, -ful, -hood, -ify, -ive, -ly, -ment, etc.
 b. 一つだけ接辞を持つ語幹に付加されうるもの:
 -ary (e.g. -ion-ary), -ic (e.g. -ist-ic), -y (e.g. -enc-y), etc.
 c. 自由に付加されうるもの:
 -able, -er (deverbal), -ness

さらに Zamma (1994) によれば、ある接辞は特定の分節音に付加されたり付加されなかったりすることがあるようである。

- (23) a. -ory と -ive は /s/ か /t/ で終わる語幹に付加される
 b. -able は二音節以上ある語幹に付加される

c. *-ic* は /a/ か /m/ で終わる語幹には付加されない

d. *-al* は /s/ か /t/で終わる語幹には付加されない

このような語彙指定は、何らかの形で接辞の基底表示に反映されていなければならない。だとすれば、それらと同時に強勢付与に関する指定がなされているとするのは、さほど不自然な仮定ではないだろう。

また、このようなアプローチを用いれば、規則そのものを形態素とする分析や(cf. Anderson (1992)), 制約そのものを形態素とする分析(cf. Russel (1995))も、それぞれを語彙指定の制約として分析することで、統一的に扱うことができる。これらの過去の成果をうまく活かせるという点も、この理論の利点と言っていいだろう。

6.3 未解決の問題

だが、この理論には二つの問題が未解決のまま残されている。それは、(i) どのような制約が語彙的に指定されうるのか、という問題と、(ii) その指定はどのように制約の階層関係の中に位置付けられるのか、という問題である。前者は Golston の理論でも「どのような違反が基底表示になりうるか」という問題に、また Anderson や Russel の理論でも「どのような規則(制約)が形態素になりうるか」という問題に対応し、以前から存在する基底表示の決定の難しさの問題に根ざしていると言える。もっと多くの語彙指定制約が明らかになれば、何らかの類型化ができることになるだろう。また後者の問題も、実際のデータが乏しい現在では一般的な理論が立てづらいのが実情である。前者の問題についての類型化をもとにするなどすれば、理論化することも可能になると思われる。いずれの問題についても、今後の調査が大きく関連することは間違いない。将来の成果を期待したい。

7. ま と め

本稿では、*-ant/-ent* を含む語の強勢のパターンを調査した上で、そのパ

ターンが従来の韻律理論での音節化に基づく強勢付与のやり方では説明できないことを主張した。このパターンは部分的に矛盾するような振る舞いとなっているが、このような矛盾は、制約の力が絶対的ではなく「より上位の制約を満たすためには違反されうる」とする最適性理論に基づけば、適切に分析されうるのである。

このような分析をするためには、-ant/-ent に対してのみ作用するような制約が必要となる。このような接辞の特別な振る舞いを説明するためには、現行のレキシコンのモデルはどれも適切とはいいがたく、何らかの層分けをするよりは接辞の語彙指定に還元した方が適切であることを、本稿では主張した。このような語彙指定には、定式化の仕方についてまだ問題が残されているが、それについては今後の研究による成果を待つことにする。

参考文献

- Anderson, Stephen (1992) *A-morphous Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Benua, Laura (1997) "Affix Classes Are Defined by Faithfulness," in *University of Maryland Working Papers in Linguistics* 5, ed. by Viola Miglio and Bruce Morén, 1-26. University of Maryland.
- Benua, Laura (1998) *Transderivational Identity: Phonological Relations Between Words*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Borrowsky, Toni (1988) "Structure Preservation and the Syllable Coda in English," *Natural Language and Linguistic Theory* 7, 145-66.
- Burzio, Luigi (1994) *Principles of English Stress*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.
- Fabb, Nigel (1988) "English Suffixation Is Constrained Only by Selectional Restrictions," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 527-39.
- Golston, Chriss (1996) "Direct Optimality Theory: Representation as Pure

- Markedness," *Language* 72, 713-48.
- Halle, Morris (1998) "The Stress of English Words 1968-1998," *Linguistic Inquiry* 29, 539-68.
- Halle, Morris and Jean-Roger Vergnaud (1987) *An Essay on Stress*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Inkelas, Sharon, Orphan Orgun and Cheryl Zoll (1997) "The Implications of Lexical Exceptions for the Nature of Grammar," in *Derivations and Constraints in Phonology*, ed. by Iggy Roca, 393-418. Oxford: Oxford University Press.
- Itô, Junko and Armin Mester (1995a) "Japanese Phonology," in *The Handbook of Phonological Theory*, ed. by John Goldsmith, 817-38. Cambridge, MA: Blackwell.
- Itô, Junko and Armin Mester (1995b) "The Core-Periphery Structure of the Lexicon and Constraints on Reranking," in *University of Massachusetts Occasional Papers* 18, ed. by Jill Beckman, Laura Walsh Dickey and Suzanne Urbanczyk, 181-209. GLSA.
- Kiparsky, Paul (1982) "Lexical Phonology and Morphology," in *Linguistics in the Morning Calm*, ed. by the Linguistic Society of Korea, 3-91. Seoul: Hanshin.
- Kiparsky, Paul (1985) "Some Consequences of Lexical Phonology," *Phonology Yearbook* 2, 83-138.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Ms. Rutgers University and University of Colorado.
- Russel, Kevin (1995) *Morphemes and Candidates in Optimality Theory*. Ms. University of Manitoba.
- Selkirk, Elisabeth O. (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Siegel, Dorothy (1974) *Topics in English Phonology*. Doctoral Dissertation, MIT.
- Zamma, Hideki (1994) "Phonological Requirements on Suffixation," *Tsukuba English Studies* 13, 21-41.
- Zamma, Hideki (1995) "Accentuation of *-ory*, *-ive*, and *-ion*," *English Linguistics* 12, 248-71.
- Zamma, Hideki (1999) "From Lexical Phonology to Lexical Specification Theory," in *Phonological Studies* 2, 69-76. Tokyo: Kaitakusya.